

のり巻雞卵の拵方

たまごを鍋にて丸くなるやう焼て、焼めの付ぬはどにしておき、海苔よろしさを切板の上におき、寒餡粉に葛の粉を半分合せて、右の海苔の上に薄く蒔て、其上へ玉子の白味を少しぬりて、右の焼玉子をのせて、随分巻しめて、扱上を布にてまき蒸籠に入れてむしてさまして、いかにも切方して用ふべし。

(くの部)

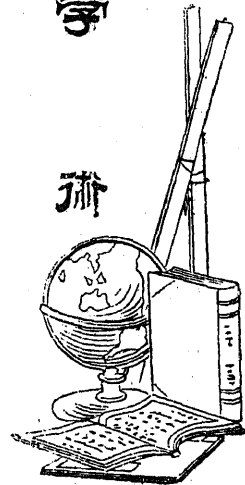
栗酒の拵方

大栗を能くむして、皮を去りて、播盆にてすりこなして、味淋酒一升の量に、白砂糖水にとかして二百匁ほど入れて、きぬ篩にて漉して入れ、二日三日三夜ねかして用ふべし、



學

術



視覚に關する話

文學士 松本孝次郎

視覚と聽覺即ち目と耳とに關しては己に度々話したことがありますが、こゝには參考書の順序に従つて、視覚に付て述べます。

小兒が生れ出た最初には目の見えぬことは疑のないのである。小兒が胎内に居る間は光線といふものがないから目を活かす機會がない。又小兒の目の生理組織から申しても光線を受取ることは出

來ぬ。そこで生れた最初は目は善く働らさませんが、漸次生理組織が變化して光線を受取ることが出来る様になつて、はじめて光線のある方に向つて目を開く様になるのである。即ち最初は盲の様であつたものが、次第に見える様になるのであるが、學齡に達する前はむしろ遠視的であります。而して學齡に達する頃には正しい視力となりますが、だん／＼進んで高等の學校に至るに従つて近視眼のものが、増して來る、年々小兒を調べて見ると小兒の幼い時は遠視眼が多く、それから學齡に達して、尙進んで行くに従つて近視眼の多くなることを認めます。

凡て人が目を働かす場合は實に多いもので、吾々の智識はこの目から入つて來るものが澤山ある。而して目で得る所の重なる智識は色に關するも

のである。

色を知ること。最初は色の名を知らずとも其の色を辨別することは出来る。即ち最初光を辨別することの出来たものが、一步進んで色を辨別することが出来る様になつたのであります。この、實際に當つて色を辨別することが出来ても其名を知らぬといふことは野蠻時代の人には善くある例で又文明に進んだ人に付て見ても往々あり得ることである。色を辨別しても其の名を知らぬのがあります。故に言語を持たぬといふことゝ、辨別力のないといふことを混同してはなりません。

色に付ての好みといふものは如何なるものであるかといふに、研究家の研究した結果によると一樣でない。しかし大体からいへば赤色を好むといふ説と黄色を好むといふ説と二つある。而して其好む

色は漸次に變化するもので、其色に付ての好みの變化は人類の發達と照し合せて恰も同一の形跡がある。即ち小兒の色に付ての好みと未だ發達しない人類の色の好みとが同一である。

次に何故に小兒が赤を好み黄を好むものであるかといふことを説明しなければならぬ。其理由は甚だ困難であるが、まづ其理由と考へらるゝことは次に説明する通りである。

眼の網膜の中で尤も早く發達するのは網膜の中心點に近い部分である。而して、この部分は赤を認めるところの細胞に富んで居るのである。故に小兒は早くから赤といふ色に注意するのである。又赤は刺激の強い光線であるから、從て幼兒の注意をひくことも強いのであらう。又生物學上から考へると、赤といふ光線は生活機能を發達させる

ものである。故に赤の光線を通して植物を培養すれば、植物は盛に發達するものである。即ち人も亦赤の光線に逢へば何か生活機能に影響を與へられて、愉快の感が起るものであるから、特に注意をひくのであらう。又黄が注意をひくのは物理學上強い光線である故である。

以上述べた理由に由つて幼兒は赤又は黄を好むものであらうと考へます。而して幼兒が其色に對する好みといふものは漸次變化するものである。即だん／＼刺激の弱い色を好む様になる。段々に刺激の弱い色を好む様になるといふことは、一般の傾であるが、實際澤山の幼兒に付て研究すれば其好みは實に色々である。此等は皆其社會の有様に由り、又其周圍の教育に由つて、様々に發達した者で、幼兒はまづ、第一に家庭に於ける親の好

みに由つて、其趣味が養はれるのである。故に幼兒の趣味の高尙であると、否とは、其家庭の趣味の如何によるといはなければならぬのである。この高尙の趣味を養ふことは各家庭に於て大に務めなければなりません。

又色には配合といふものがある、これは二つ以上の色をならべて比較する時に起る趣味である。この趣味も亦教育によつて養ふことの出来るものであるから、注意して養成しなければならぬ。

色の名は正しく幼兒に教へなければならぬ。色の名は時々大人でも用ゐるわやまつて居ることかある。かの青と緑とを用ゐるわやまつて居るのは其の一例で緑といふべき色を青といふて居るなどは珍しい事ではない。青は天空のはれ渡つて居る時の色が正しい色で、木の葉の色を青といふのは、わや

まりである。木の葉の色は緑である。學問上の青は空色である。然るに多くの人は緑といふべきを青といつて居る。要するに、色の名は確實に教へて置くことが必要である。而して確實の名を教へると共に色の正しい觀念を作ることが必要であるこれには幼兒に正しい色を示すことが大切である次に或る色と他の色とを辨別する力を養はなければならぬ。尙進んでは同種類の色の中でも其の濃淡の度の僅の差異を辨別する力を養はなければならぬ。要するに色の教育に付ては

- 一、色其のものを能く記憶させて、其色の正しい名を用ゐしむること。
- 二、色に付きての美的の趣味を養ふこと。
- 三、辨別力といふ智力の作用を強くすることを務むること。

而して一の面白い現象は色盲が西洋人に多くして東洋人に少いことである。蓋し色盲と云ふものは天然の欠損であつて、網膜にある色に關する細胞の欠けたもので生理上の欠損である。

Wer dir von andern Schlecht spricht,
Spricht auch andern Schlecht von dir.

汝の面前にて他人の悪口をいふ者は他人の面前にて又汝の悪口をいはん。

史傳

節女阿正の傳 (承前)

米 溪 子



霞に匂ふ花の蔭、狂風屢驚さ易く、冷露滴る月の前、妖雲頻りに思を惱ます、あはれ、阿正は之れ孱弱なる一介の女子、利に迷ふ悪鬼に擁せられて、閻王廳下の幽囚となり、鐵案將に下らんとす、紅蓮か、焦熱が、愁緒胸に纏れて獨り唇を噛み、万感湧き來りて涙潜々たり。

万助苛立て曰く、此の事、最早九分を運ぶ、残る所は末の一段のみ、末事に拘はりては到底大事